

資料

川崎医療福祉大学生の友人関係 —グループの特徴に関する調査から—

吉 田 浩 子^{*1}

はじめに

我国の大学生の特徴について、近年も様々な研究がなされている¹⁻¹⁴⁾。岡田⁵⁾は、大学生の自分自身への内省傾向と友人関係について調査し、①内省に乏しく友人関係を回避する傾向の高い青年、②表面的には明るく友人関係をとりながらも他者からの評価や視線に気がつかう青年、③自己の内面に関心が高く、自分の生き方などを深刻に考える青年、の3つのタイプを見出した。また、大学生の友人関係の特徴として、友人関係面で深刻さを回避し楽しさを求め、友人と一緒にいることを好む「群れ志向群」、対人関係の深まりを避け、他者からの評価を気にする「対人退却群」、心を打ち明け、一人の友人との関係を大切に「やさしさ志向群」の3つの傾向があると報告している⁶⁾。

本学の学生についても著者らが1999年に簡単な実態調査を行いその結果を報告した¹⁴⁾。その際、調査対象とした学生の90.1%の学生が自然発生的なグループに帰属していることが明らかにされ、学生の友人関係がこのグループによって規定されている可能性が示唆された。

しかし、一般的には「常に決まった仲間と行動するつき合い方」は大学生になるとほとんど表れない^{4,10)}と言われ、学校内で自然発生的に生じるグループについては、女子高校生を対象にした研究が多い。例えば、天野¹⁵⁾は、女子高生に気の合うもの、仲の良いもの同士で集団を形成し行動を同調させる傾向があることを指摘した。それは、成員の自発的な心理的關係に基づいて成立し、默契や相互の期待以上に形式的な規則をもたない集団（非公式集団）で、非常に凝集性が強いが、グループの成員間の関わりは、表面的であることが多いとされる。同じグループに帰属し一緒に行動している女子高生の関係は、相互に意見を交換し、内面を打ち明けるような関係には進展しないことが多いが¹⁶⁾、グループ

に入っていないと高校生活に不便や不都合が生じるため、どうしてもグループに入らざるを得ない¹⁷⁾。女子高校生のグループは、互いの安全を高めるための防衛的な目的で維持されている¹⁷⁾ことになる。

では、大学生であるにも関わらず学生の9割以上がグループに帰属していた本学学生の傾向は現在も継続し、また彼らの帰属するグループとはこのような女子高校生に見られるグループと同じと言えるのであろうか。

そこで本調査では、「グループ」を『大学構内で行動を共にする自然発生的集団で、学年と学科が同じ人の集まり』と定義し、最終的には大学生の対人関係の特徴を友人関係から明らかにすることを目的とする調査の一環として、グループ内の友人関係について調査した。

調査対象と方法

本学学生におけるグループ内の友人関係について調べることを目的として川崎医療福祉大学学部学生を対象としてアンケート調査を実施した。2001年2月に実施した予備調査結果を参考に本調査用紙を作成し、同年4月に本調査を実施した。回答終了後アンケートをその場で直ちに回収し、887人の回答を回収した。無回答、記入もれ等の不備を除き最終的に総計796名（新入生367名、在学生429名）のアンケートを有効回答とし解析の対象とした（表1）。

表1 調査対象

川崎医療福祉大学学部学生			
	男（人）	女（人）	合計（人）
新入生（人）	90	277	367
在学生（人）	101	328	429
合計	191	605	796

2001年4月現在

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
（連絡先）吉田浩子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

結 果

[1] グループ帰属の実際

(1) 帰属グループの有無

学生のグループの帰属に関し、1999年の調査結果と同様の傾向が維持されているかどうかを確かめるために、学部学生に対して、現在特定のグループに帰属しているかどうかを尋ねた(表2)。46%が、「唯一」のグループに帰属、49%が「複数」のグループに帰属、5%がどこのグループにも帰属していないことがわかった。すなわちアンケート回答者数全体の95%がグループに帰属していた。

現在も9割以上の学生がグループに帰属していることが確認されたので、次にそのグループの構成員について調べた。

表2 グループへの帰属

唯一のグループに帰属している	46%
複数のグループに帰属している	49%
特定のグループに帰属していない	5%
各カテゴリーを選択した人数の回答者数に対する割合を示した。	

(2) グループの構成について

現在帰属しているグループの構成人数を聞いた(表3)。男子学生に比べ「2人」、「3～4人」を選択した女子学生が有意に多く、「5～6人」、「7～8人」、「9人以上」を選択した学生は、女子学生より男子学生に有意に多かった($\chi^2 = 27.89$ $p < 0.05$)。このことから、男子学生の方が女子学生より人数の多いグループに帰属していると言える。グループの構成人数に学年差は認められなかった。

また、グループに帰属している学生の95%が「同性のみ」のグループに帰属し、男子学生に比べ「同性のみ」のグループに帰属している女子学生の割合が有意に高かった($\chi^2 = 69.59$ $p < 0.05$)。グループの成員の性比に学年差は認められなかった。

表3 グループの構成人数

カテゴリー (構成人数)	調査対象者		
	全体 (%)	男子学生 (%)	女子学生 (%)
2人	11	4	13
3～4人	42	34	44
5～6人	30	36	28
7～8人	11	15	10
9人以上	6	11	5

各カテゴリーを選択した人数の各回答者数に対する割合を示した。

(3) グループを作るきっかけ

では、このようなグループはどのようにして成立したのだろうか。グループが構成されたきっかけに

ついて調べた。6つの項目(1 入学式をはじめ、新入生オリエンテーションの時、偶然互いに近くに座っていたから、2 偶然話してみたら、互いに仲良くやっていけそうだったから、3 学籍番号が近かったから、4 卒業した学校の友達がいたから、5 以前属していたグループの人とうまくいかず、今のグループが受け入れてくれたから、6 その他)の中から当てはまるものを全て選択させた(表4)。その結果、「1 偶然近くに座った」(53%)、及び「2 偶然話した」(51%)を半数の学生が選択し、偶然と物理的近さがグループ構成のきっかけとなることがわかった。

表4 グループ帰属のきっかけ

カテゴリー	人数の割合 (%)
1.偶然近くに座った	53.0
2.偶然話した	51.0
3.学籍番号に近い	22.0
4.大学以前の同窓	14.0
5.自分を受入れてくれた	5.0
6.その他	7.0

各カテゴリーを選択した人数の

回答者数に対する割合を示した(複数回答)。

[2] グループ内の友人関係

[1]において、現在も学部学生の9割が特定のグループに属していることが明らかにされた。そこで、彼らの友人関係について更に詳しく知ることを目的に、帰属しているグループの構成員間の関係について調べた。

「現在グループに帰属している」と答えた学生に、友人との関係を尋ねる50の設問(表5)に「はい」あるいは「いいえ」で答えてもらった。設問間の関連を調べるため、得られた結果を主成分分析を用いて解析し、以下のような結果を得た。

(1) 調査対象学生全体の傾向

解析の対象とした学生全体の回答の主成分分析結果から、寄与率10.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量絶対値0.5以上の設問とともに、そこから推定された因子の解釈を表6に示した。

因子Iでは、「20.グループの友人といえると楽しい(因子負荷量0.85)」の因子負荷量が最も高く、「47.大学卒業後も、グループの人達と友人関係を続けたい(0.79)」、「29.グループの友人の人柄を気に入っている(0.76)」、「49.グループの友人を信頼している(0.76)」、「43.互いに傷ついてもグループの友人同士本音で語り合う(0.71)」、「38.グループの友人から好かれたいと思う(0.71)」、「16.もっとグループの友人と親しくつき合いたいと思っている(0.70)」

表5 グループの友人とのつきあい方 - 質問項目

1. ほとんど同じ講義を選択しており、受講時にも近くの席に座っている。
2. 大学にいる時は、ほとんど毎日昼食を一緒に食べている。
3. 同じ部活またはサークルに所属している人がある。
4. 一日の講義が終わっても、一緒に勉強したり、おしゃべりをすることが多い。
5. グループの中には、特に親しい友人がいる。
6. グループ全員で、一月に3回以上遊ぶことがある。
7. グループの人達には、用のあるときだけ電話またはメールをする。
8. みんなから「かわっている」と思われたくないからグループに所属している。
9. 講義の代返を頼むことがある。
10. 特定の話題について真剣に論議することがある。
11. グループの友人の言動に対していやな思いをした場合みんなで話し合う。
12. 講義やテストの情報を提供し合う。
13. グループの友人に甘えすぎないようにしている。
14. 自分の意見がグループの友人と異なっても自己主張できる。
15. グループに所属していると何となく安心である。
16. もっとグループの友人と親しくつきあいたいと思っている。
17. グループに所属していると、他の友人との交流が少ないことが気になる。
18. グループから離れてひとりで行動する時は心細い。
19. グループの友人によって、話す内容が異なる。
20. グループの友人と一緒にいると楽しい。
21. グループの友人には高校以前の友人より親しみを感じている。
22. グループの友人とのつきあいは、表面的なものであると思う。
23. グループの友人の考えに反対しないし、自分の考えに反対されるのもいやだ。
24. グループの友人と大学構内以外ではつきあわないようにしている。
25. グループの友人には全く気をつかわなくていい。
26. グループの友人に心を打ち明けている。
27. 他のグループをうらやましく感じるときがある。
28. 現在のグループの友人が自分にとって最高に気の合う友人だと思う。
29. グループ内の友人の人柄を気に入っている。
30. グループ内で苦手な人がある。
31. グループの人の中には、用が無くても電話またはメールをする友人がいる。
32. グループの友人ととても気が合うわけではないが、ひとりになるのも寂しいし他のグループに移るのも困難だから現在のグループに所属している。
33. グループの友人の言動に対していやな思いをした場合何も言わず我慢する。
34. 楽しい雰囲気になるように気をつける。
35. グループの友人からどう見られているか気になる。
36. 現在のグループの友人達に満足している。
37. グループの友人が困っていても自分には関係のないことだと思う。
38. グループの友人から好かれたいと思う。
39. グループの友人のプライベートな領分に踏み込まないし、踏み込まれたくない。
40. グループの友人の中には、自分のことを理解してくれる人はいないと思う。
41. 互いに傷つけないように気をつけている。
42. 時々、グループでいるよりもひとりでいる方が気楽だということがある。
43. 互いに傷ついてもグループの友人同士本音で語り合う。
44. 深刻に悩んでいることは、グループの友人には相談しないようにしている。
45. 世間話をする事が多くグループの友人のプライバシーに深入りするような話はしない。
46. グループの友人の話がおもしろくなくても、熱心に聞くようにしている。
47. 大学卒業以後も、グループの人達と友人関係を続けたい。
48. もっと自分を理解してくれる友人がいたらいいと思うことがある。
49. グループの友人を信頼している。
50. グループの友人よりもっと親しいと思う友人が同じ学科、同じ学年にいる。

以上の質問に対し「はい」または「いいえ」で回答を求めた。

の因子負荷量が比較的高かった。これらからグループの友人との積極的な関わりが示唆された。さらに「36.現在のグループの友人達に満足している(0.66)」、「5.グループ内に親友がいる(0.51)」、「26.グループの友人に心を打ち明けている(0.50)」からは、グループの友人と親しく関わり現状に満足し

ていることが伺えた。また、「1.ほとんど同じ講義を選択しており、受講時にも近くの席に座っている(0.68)」、「15.グループに所属していると何となく安心である(0.66)」、「2.大学にいる時は、ほとんど毎日昼食を一緒に食べている(0.64)」、「12.講義やテストの情報を提供しあう(0.62)」からは、グループの

表6 グループの友人とのつきあい方1 . 調査対象者全体

	因子 I	因子 II
寄与率 (%)	17.4	11.5
固有値	8.7	5.8
設問	因子負荷量	因子負荷量
20. 楽しい	0.85	
47. 卒業後も友人でいたい	0.79	
29. 人柄が好き	0.76	
49. 信頼している	0.76	
43. 本音で話したい	0.71	
38. 好かれない	0.71	
16. もっと親しくなりたい	0.70	
1. 同じ講義を選択し近くに座る	0.68	
15. 安心できる	0.66	
36. 満足している	0.66	
2. 毎日昼食を一緒に食べる	0.64	
12. テスト等の情報交換	0.62	
5. グループ内に親友がいる	0.51	
26. 心を打ち明けて話せる	0.50	
22. 表面的なつきあい		0.63
32. 仕方なく所属している		0.62
27. 他のグループがうらやましい		0.57
48. もっと理解ある友人が欲しい		0.54
45. プライバシーには立ち入らない		0.51
41. 気を遣う		0.51
因子の解釈	積極的・満足 ・同調的	消極的・ 不満足

寄与率10.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。設問は、設問番号とともに表5の内容を要約して示した。

友人と行動を同調させることで、大学生活に役に立つ情報を交換するといった実利的な利益だけでなく、一緒にいることによる安心感から情緒的安定を得ていることが推測された。そこでこの因子 I を「積極的・満足・同調的」因子と解釈した。

因子 II には、「22. グループの友人とのつきあいは、表面的なものであると思う (0.63)」、「32. グループの友人ととても気が合うわけではないが、ひとりになるのも寂しいし他のグループに移るのも困難だから現在のグループに所属している (0.62)」、「45. 世間話をする事が多くグループの友人のプライバシーに深入りするような話はしない (0.51)」、「41. 互いに傷つかなないように気を遣っている (0.51)」、が含まれ、因子 I とは反対にグループの友人に対する消極的な姿勢が伺えた。更に、「27. 他のグループがうらやましく感じる時がある (0.57)」、「48. もっと自分を理解してくれる友人がいたらいいと思うことがある (0.54)」も含まれ、これはグループの友人に対する不満の表れと考えられた。そこで因子 II を「消極的・不満足」因子と解釈した。

(2) 女子学生と男子学生

更にグループ内の友人関係のあり方に性差がある

かどうかを知るために、回答を男女別に分け、それぞれを (1) と同様に解析した (表 7)。以下、初出の場合以外は、原則として因子の解釈に用いた設問の設問番号と因子負荷量のみを () で示すこととする。

女子学生では、因子 I は、調査対象学生全体の因子 I と同様の傾向を示し、グループの友人との関係を好意的に評価し積極的に関わっていた。よって、「積極的・満足・同調的」とこの因子を解釈した。因子 II では、「消極的」関係を示す設問 (設問番号32 (因子負荷量0.55), 22 (0.55)) と友人に対する「不満足」を示す設問 (48 (0.56), 27 (0.55)) の因子負荷量がほぼ同様の値を示し、友人に気を遣いながら (41 (0.55)) 表面的なつきあいをしている (22 (0.52)) ことがわかった。よって、「不満足・消極的・気遣い」を示す因子と解釈した。

男子学生においても因子 I は調査対象学生全体と同様の傾向を示したが、女子学生には見られなかった「14. 自分の意見がグループの友人と異なっても自己主張できる (0.59)」、「13. グループの友人の甘えすぎないようにしている (0.51)」がこの因子に含まれていた。グループの友人に対して適度に距離を置きつつも積極的に関わり、その関係に満足しているこ

表7 グループの友人とのつきあい方2：女子学生と男子学生

	女子学生		男子学生	
	因子 I	因子 II	因子 I	因子 II
寄与率(%)	15.6	11.4	24.1	10.0
固有値	7.8	5.7	12.0	5.0
設問	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量
20. 楽しい	0.76		0.93	
47. 卒業後も友人でいたい	0.74		0.87	
49. 信頼している	0.72		0.76	
29. 人柄が好き	0.71		0.79	
36. 満足している	0.70		0.67	
16. もっと親しくになりたい	0.64		0.76	
43. 本音で話したい	0.60		0.81	
26. 心を打ち明けて話せる	0.58		—	-0.52
15. 安心できる	0.58		0.71	
28. 最高に気が合う	0.58		—	
38. 好かれない	0.57		0.76	
1. 同じ講義を選択し近くに座る	0.54		0.72	
2. 毎日昼食を一緒に食べる	0.54		0.61	
5. グループに親友がいる	0.52		0.54	
12. テスト等の情報交換	0.50		0.77	
14. 自己主張できる	—		0.59	
19. 要件により友人を使い分ける	—		0.52	
13. 甘えすぎないようにする	—		0.51	
48. もっと理解のある友人がほしい		0.56		
27. 他のグループがうらやましい		0.55		
41. 気を遣う		0.55	0.52	
32. 仕方なく所属している		0.55		0.51
22. 表面的なつきあい		0.52		0.65
因子の解釈	積極的・満足・同調的	不満足・消極的・気遣い	積極的・満足・同調的・功利的・気遣い	表面的・不満足

寄与率10.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。
設問は、設問番号とともに表5の内容を要約して示した。

とが推測できた。更にグループの友人に対して「気遣い」(41(0.52))していること、同じ講義を履修する等「同調的」に行動していること(1(0.72)、2(0.61))が示唆された。「不満足」な友人に対して気を遣っている女子学生とは反対に、男子学生は「満足」している友人に対して気を遣っていることになる。また、女子学生に見られた情報交換(12(0.77))だけでなく要件による友人の使い分け(19(0.52))が見られたことから、功利的な友人関係が伺われた。よって、男子学生の因子Iを「積極的・満足・同調的・功利的・気遣い」を示す因子と解釈した。因子IIからは、友人と表面的なつきあいをしており(22(0.65))、そのグループには仕方なく所属している(32(0.51))、グループのメンバーと「心を打ち明けて話せる」関係にはない(26(-0.52))状態が伺われた。よって「表面的・不満足」を示す因子と解釈した。

以上から、グループの友人との関わり方に男女で共通する部分と異なる部分があることが分かった。

(3) 新入生と在学生

次に、大学内におけるグループ内の友人関係と在学年数の関わりを知るために、得られた回答を調査実施日の約3週間前に入学したばかりの新入生と2年生以上の在学生に分け、(1)(2)と同様に解析した(表8)。

新入生の因子Iは、調査対象者全体の因子Iと同様の傾向を示したので、「積極的・満足・同調的」因子と解釈した。因子IIも調査対象者全体の因子IIと同様の傾向を示したが、「33.いやなことも我慢している(0.51)」が含まれていたため、「不満足・表面的・忍耐」因子と解釈した。

在学生においても、因子Iには、調査対象者全体の因子Iと同様の「積極的」なつきあい方がみられたが、「12.テスト時の情報交換(0.86)」が高い因子負荷量を示し、「功利的」関係が強く示唆された。因子IIからは、「消極的・不満足」な関係が示唆された。新入生、在学生共に因子Iが「積極的・満足」因子、因子IIが「消極的・不満足」因子と特徴づけ

表8 グループの友人とのつきあい方3 . 新入生と在學生

	新入生		在學生	
	因子 I	因子 II	因子 I	因子 II
寄与率 (%)	15.1	10.8	20.1	11.6
固有値	7.5	5.4	10.1	5.8
設問	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量
20. 楽しい	0.79		0.88	
12. テスト等の情報交換	—		0.86	
47. 卒業後も友人でいたい	0.76		0.82	
29. 人柄が好き	0.75		0.77	
49. 信頼している	0.73		0.77	
16. もっと親しくになりたい	0.72		0.69	
43. 本音で話したい	0.67		0.74	
38. 好かれない	0.67		0.73	
36. 満足している	0.66		0.66	
15. 安心できる	0.61		0.68	
1. 同じ講義を選択し近くに座る	0.59		0.72	
2. 毎日昼食を一緒に食べる	0.59		0.67	
5. グループに親友がいる	—		0.59	
26. 心を打ち明けて話せる	—		0.60	
28. 最高に気が合う			0.52	
14. 自己主張できる			0.50	
32. 仕方なく所属している		0.66		0.59
22. 表面的なつきあい		0.63		0.64
27. 他のグループがうらやましい		0.52		0.61
48. もっと理解ある友人がほしい		0.52		0.54
33. いやなことも我慢している		0.51		—
45. プライバシーには深入りしない		—		0.56
44. 深刻な悩みは相談しない				0.51
因子の解釈	積極的・満足・同調的	不満足・表面的忍耐	積極的・満足・功利的・同調的	表面的・不満足

寄与率10.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。

設問は、設問番号とともに表5の内容を要約して示した。

られ、全体的な傾向は共通していた。その一方「功利的」な関係は在学生の因子Iにのみ強く現れ、「いやなことも我慢している」状況は新入生の因子IIからのみ推定された。また、因子負荷量の高い設問数が新入生に比べ在学生に多く見られ、新入生よりも在学生のグループの友人関係は複雑化していることが分かった。

(4) 異性との交際とグループの友人関係

その他、グループの友人関係に影響を与える要因として、ここでは異性との交際の有無に注目した¹¹⁾。

まず特定の異性との交際の実際について調べた。アンケート調査実施時点で特定の異性と交際しているかどうか尋ねた結果を表9に示した。「現在、グループに所属している」と答えた学生全体の28%が「特定の異性と交際している」答えた。「異性と交際している」学生数は、新入生よりも在学生に有意に多かった($\chi^2 = 28.12$ $p < 0.05$)。学年が上がるにつれて異性と交際する機会が増えていると言える。

表9 異性との交際-交際の有無

カテゴリー	調査対象者		
	全体	新入生	在學生
交際している	28 (%)	19 (%)	36 (%)
交際していない	72	81	64

「グループに所属している」学生数に対する各カテゴリーを選択した人数の割合を示した。

異性と交際している学生、していない学生の人数の割合に性差はなかった。

このような異性との交際はグループ内の友人関係に影響を及ぼしているのだろうか。「特定の異性と交際している」と答えた212人の学生に、「グループの友人」及び「交際している異性」との関わりについて、3つの視点からその違いを聞いた(表10)。

「特定の異性と交際している」学生の58%が「グループの友人よりも交際している異性に悩みを相談することが多い」と答えた。75%が「グループの友人より交際している異性を信頼している」と答え、49%が「グループの友人よりも交際している異性と

表10 グループの友人と異性の交際相手

カテゴリー	グループの友人	交際相手
相談相手として選択	42 (%)	58 (%)
より信頼している	25	75
より多くの時間を共有	51	49

各カテゴリーにおいて「グループの友人」あるいは「交際相手」のどちらかを選択させた。
「異性と交際している学生」数に対する各カテゴリーを選択した人数の割合を示した。

過ごす時間が長い」と答えた。これらの結果から、「異性と交際している」学生は①相談相手②信頼性において、グループの友人よりも交際相手を優先する傾向にあると言えよう。そこで次に、交際相手の有無とグループ内の友人関係の関わりを更に詳しく調べた。

「グループに帰属している」学生を、交際相手がいる学生と交際相手がいない学生の二つのカテゴリーに分け、それぞれのカテゴリーについてグループ内の友人関係に関する回答結果を主成分分析を用いて解析した(表11)。

異性と交際している学生は、グループの友人とは表面的で消極的な関係で(22(0.68), 44(0.57), 26(-0.56)), 大学構内以外ではつきあわず(24(0.58), 47(-0.55)), 不満を持ちながら(36(-0.60), 28(-0.57))仕方なくグループに所属していた(32(0.58))。これらの要因を「消極的・不満足・学内中心」因子と解釈した。因子IIは寄与率6.8%と低いが、これらの学生がグループの友人と親しくなりたい(16(0.51)), 友人に好かれたい(38(0.50))と希望し

ていることがわかった。そこでこの因子を「親密さの希求」と命名した。

一方、異性と交際していない学生では、グループの友人と親しくつきあい(22(-0.63), 24(-0.62))その関係に満足している(27(-0.51))ことが伺えたので、これを「積極的・満足」因子と解釈した。因子IIは異性と交際している学生と同様に「親密さの希求」因子と解釈した。

考 察

[1] グループ帰属の実際

本調査から、「グループに帰属している」かどうか尋ねた結果、95%の学生が現在グループに帰属していることが分かった。これは1999年の調査と同様の結果であり、本大学の学生のほとんどは、グループに帰属していると言える。

これらのグループの構成人数は3～4人が一番多く、5～6人が二番目に多かった。永沢⁷⁾は、女子大学生グループの大きさは2～6人とし、天野¹⁵⁾は、女子高校生グループの構成人数を4、5人としている。それぞれの研究においてグループの構成人数に多少差はあるものの、7～8人以上の人数の多いグループ、及び2人組のグループは構成されにくいと言える。また、男子学生は女子学生より人数の多いグループに帰属する傾向があった。中村は¹²⁾、女子大学生は男子大学生に比べ、二者関係からもたらされる報酬の大きさを考慮にいれながら、交際を発展させていく傾向があり、男子大学生は二者関係

表11 グループの友人とのつきあい方4. 交際相手の有無

	異性と交際している		異性と交際していない	
	因子 I	因子 II	因子 I	因子 II
寄与率 (%)	14.4	6.8	13.2	6.3
固有値	7.2	3.4	6.6	3.2
設問	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量	因子負荷量
22. 表面的なつきあい	0.68		-0.63	
24. 大学構内以外ではつきあわない	0.58		-0.62	
27. 他のグループがうらやましい	—		-0.51	
32. 仕方なく所属している	0.58			
44. 深刻な悩みは相談しない	0.57			
36. 満足している	-0.60			
28. 最高に気が合う	-0.57			
26. 心を打ち明けて話せる	-0.56			
47. 卒業後も友人関係を続けたい	-0.55			
49. 信頼している	-0.52			
16. もっと親しくつきあいたい		0.51		0.50
38. 友人から好かれたい		0.50		0.50
因子の解釈	消極的・不満足 学内中心	親密さの希求	積極的・満足	親密さの希求

寄与率6.0%以上の因子を取り出し、因子負荷量の絶対値が0.5以上の設問を示した。

設問は、設問番号とともに表5の内容を要約して示した。

よりも広範囲にわたる「仲間集団」の形成に関心があると述べている。性別によって、グループの友人に期待することが異なるため、本研究においてもグループの構成人数にも違いが表れたのかもしれない。

さらに、グループを作るきっかけとして、物理的距離の近さと偶然性が要因となっていることがわかった。この結果は、女子高校生のグループの構成要因¹⁷⁾と酷似していた。

[2] グループ内の友人関係

本調査の結果から、学年、男女を問わず本学におけるグループの友人とのつき合い方は、大きく二つに分けられることが分かった。ひとつはグループの友人関係を「積極的・満足」と評価していた学生達である。落合ら¹⁰⁾は、青年期における大学生の友人とのつき合い方の特徴には「防衛的」、「積極的相互理解」、「自己自信」、「全方位的」、「被愛願望」、「同調」があると指摘し、この6種類のつき合い方の特徴を多重比較した結果、「積極的相互理解」が顕著で、「同調」や「全方位的」があまり見られないと結論づけた。本研究においてもグループの友人関係を「積極的・満足」と評価している学生には、グループの友人達と互いの情報を交換し、積極的な相互理解を推進しようとする姿勢が伺われたが、その一方、本学ではグループの成員間で行動を同調させる傾向が見られ、この点が落合らの調査結果と異なっていた。この点については[3]で改めて考察する。

もう一つはグループの友人とのつき合いを、「消極的・不満足」と評価していた学生達で、彼らはグループの友人と距離を置いたつき合い方をしていた。この学生達は、グループに帰属していても、グループの友人達と真剣に議論し合うこともなく、互いの領分に立ち入った話もしない。この学生たちは、上野ら¹³⁾が「表面群」と分類した大学生の友人関係と共通の特徴を有していると思われた。

また、これらの友人関係には性差が見られた。大学生の友人関係には、男女による差異があることが指摘されており、男子学生は、活動を共有することが中心なのに対し、女子学生は親密な関係を作ることが中心であると言われている¹²⁾。本調査の結果では、男子学生の因子Ⅰ「積極的・満足」因子を示す特徴として「気遣い」が抽出されたのに対し、女子学生ではこの他者に対する「気遣い」は、因子Ⅱ「不満足・消極的」因子の特徴となっていた。男子学生は心理的距離が近い友人に対して「気遣い」、女子学生は、友人として不満足な他者に対して「気遣い」しつつその「気遣い」自体を疎ましく思っていた。先行研究が指摘する友人関係における性差が本調査においても再確認されたと言える。

また、新入生と在学学生を比較した結果から、グループの友人とのつき合い方は在学年数が増すにつれて複雑になっていくことが分かった。在学学生は大学の友人と過ごした時間が新入生に比べると長いので、グループの友人の性格や生活観が把握でき、それに応じて互いの関係を構築していると思われる。

さらに、異性との交際の有無がグループの友人関係の評価に関連する要因となり得ることが改めて示唆された。本調査では、28%の学生が特定の異性と交際しており、彼らはグループの友人よりも交際相手をより信頼し悩みを相談していた。異性と「交際している」学生は、グループの友人とのつき合いを「消極的・不満足・学内中心」と評価しているのに対し、異性と「交際していない」学生は「満足・積極的」と評価していた。榎本¹¹⁾は「青年期に入ると、対人関係の中心は徐々に交際相手が重要視されるようになる」と指摘している。現在交際相手がいる学生は、交際相手との関係をより親密なものにしようとしているのかもしれない。ただし、親しいグループの友人の不在と、異性との親密な交際の因果関係は、本調査からは明らかにできなかった。

[3] 女子高校生と本学学生

先に述べたように、大学生の友人関係を対象とした調査には、「常に決まった仲間と行動するつき合い方」はほとんど表れず^{4,10)}、大学生は中学生や高校生に見られる「友人と行動を同調させるつきあい方」に対する期待度も低い^{8,10)}と結論づけている報告がある。しかし、本調査では、ほとんどの学生が決まったグループに属し同じ講義を選択し昼食を毎日一緒に食べていた。女子高校生は教室で昼食をとる場合もグループごとに机を寄せ合って食べ、廊下を歩く時も必ずグループの友人達と歩き¹⁷⁾、一緒に昼食を食べなくなるといことは、そのグループから排斥されたことを意味する⁶⁾とされる。新入生、在学学生ともにこれら女子高校生に特有とされる友人とのつき合い方の傾向がみられたので、本学では学年に関わらずこの傾向があると言える。

しかし、女子高校生との違いも明らかとなった。女子高校生は、互いの安全性の確保や、相手の助力を当てにする功利的な目的の充当のために、仲の良いもの同士でグループを形成する傾向があり、個々のグループは、非常に凝集性が高く排他的であるとされる¹⁵⁾。本学では、半数の学生が「複数」のグループに所属していることから、彼らのグループは女子高校生ほど凝集性が強くないと推定される。さらに、女子高生のグループ内の友人関係は表面的であり、内面を打ち明けるような関係ではないと指摘されているが¹⁷⁾、本調査対象の大学生の多くは、グ

グループの友人同士で自己の情報を交換し、積極的に友人との親密さを深めようとしていた。

このように、一見同じに見える学生のまとまりでも、女子高校生と本大学学生とではグループのあり方や構成する理由に違いがあると言える。ただし、学生の中には、女子高校生のようにグループの友人に対して距離をおいた関係を保っている学生も存在した。在学生にもこのような特徴が表れていたことから、大学生になっても女子高校生に非常に近い友人関係を築いている学生が存在していると言える。

また、本調査では、調査対象の女子学生の人数が男子学生の約3倍であり、本学学生の友人との付き合い方が女子高生的なのは、女子学生の人数の割合が非常に多かったことに由来すると考えることも可能である。この点については今後の課題である。

結 論

今回の調査結果から、本学学生のグループにおける友人関係の特徴について以下のことが分かった。
大学構内では、9割以上の学生がグループに帰属

していた。そのグループの構成人数は、「3～6人」が多く、回答者の95%が同性のみのグループに所属していた。これらのグループは自然発生的に生まれ、物理的距離の近さがグループ構成のきっかけになることが多い。グループの友人関係は、性、在学年数、交際相手の有無により影響を受け、結果的に自分が帰属しているグループに満足している学生と、満足していない学生が存在した。また、女子高校生特有と言われている「同調行動」がグループの友人関係に見られたが、これが本学独自の特徴であるかどうかについては、本調査からでは不明であり、今後の課題である。

本論文は、川崎医療福祉大学医療福祉学科清水芳江さんの平成13年度卒業論文をもとにまとめたものです。彼女の努力に敬意を表し、深く感謝いたします。また、本調査に用いたアンケート結果の整理に用いた統計処理の方法について、川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科、小河孝則助教授に御指導賜りました。心からお礼申し上げます。

文 献

- 1) 下山晴彦：大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—。教育心理学研究，40(2)，121-129，1992。
- 2) 土川隆史：スチューデント・アパシー。初版，同朋舎出版，京都，96-130，1990。
- 3) 宗像剛：大学生のアパシー傾向の男女別検討。心理学研究，67(6)，458-463，1997。
- 4) 長沼恭子，落合良行：同性の友人との付き合い方からみた青年期の友人関係。青年心理学，10，35-47，1998。
- 5) 岡田努：現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖症」との関係。発達心理学研究，4(2)，162-170，1993。
- 6) 岡田努：現代青年の友人関係に関する考察。青年心理学研究，5(3)，43-55，1993。
- 7) 永沢幸七：女子学生の informal group の発生要因について（その1）。東京家政学院大学紀要，9，17-27，1969。
- 8) 和田実：同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連性。心理学研究，67(3)，232-237，1996。
- 9) 岡田努：現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察。教育心理学研究，43(4)，354-363，1995。
- 10) 落合良行，佐藤有耕：青年期における友達との付き合い方の発達の变化。教育心理学研究，44(1)，55-65，1996。
- 11) 榎本淳子：青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化。教育心理学研究，47(2)，180-190，1999。
- 12) 中村雅彦：大学生の友人関係の発展過程に関する研究—関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討—。社会心理学研究，5(1)，29-41，1990。
- 13) 上野行良，上瀬由美子，松井豊，福富護：青年期の交友関係における同調と心理学距離。教育心理学研究，42(1)，21-28，1994。
- 14) 吉田浩子：川崎医療福祉大学生の現在。川崎医療福祉学会誌，10(2)，429-433，2000。
- 15) 天野隆雄：女子生徒のインフォーマル・グループ。アジア文化，10，87-95，1985。
- 16) 佐藤有耕：高校生女子が学校生活においてグループに帰属する理由の分析。神戸大学発達科学部研究紀要，3(1)，11-20，1995。
- 17) 佐藤有耕，落合良行：女子高校生のグループの成員数と友人との付き合い方の関係。筑波大学心理学研究，15，185-193，1993。

(平成14年5月31日受理)

**The Relationships among Students in Kawasaki University of Medical
Welfare — from the Analysis of Questionnaire Survey —**

Hiroko Yoshida

(Accepted May 31, 2002)

Key words : RELATIONSHIPS, UNIVERSITY STUDENTS, QUESTIONNAIRE SURVEY

Correspondence to : Hiroko Yoshida

Department of Medical Social Work, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.12, No.1, 2002 151-160)